

築かれていく沼津自慢

中心市街地で開催される催しの中でも、多くの来場者を集めるまでに「成長」した沼津自慢フェスタ。大きくなっているのは規模や会場の広さだけではなく、今年も自慢フェスタでは「ゴミがほとんど落ちていない。会場にいて気持ちがいい」という嬉しい言葉が聞こえてきました。会場が美しく保たれているということは、実行委員や出店者の案内はもちろんですが、会場に足を運んでくれた人たちも一緒にあって、沼津自慢フェスタを大切にしているから美しい会場はみんな沼津を楽しんでいる心意気を通して削り上げられた、自慢フェスタならではの文化と言っていでしょう。

小さなビアガーデンから数えて10回目とキャリアを重ねてきましたが、来場者の目線で言えばマンネリズムを感じることはありません。かと言って、常に新しいことを取り入れ、目まぐるしく変わっていくことをよしとする「イベント」でもないように感じました。その背景には当日並べられる沼津自慢は決して一過性のものでなく、沼津で活躍した先人たちの知恵や誇りのもとに成り立っているということにリスペクトがあるからです。きつと自慢フェスタも沼津の誇りそのものになりつつあるのでしよう。

会場に足を運んだ人もそうでない人

も、私たちが自慢フェスタに対してできることは沼津での日常を誰かに自慢することです。

実行委員の皆さんは予期せぬ方向に行きそうな時に軌道修正をし、変えずに繰り返していくことと臨機応変に対応することを見極め、次回に向けて常にアイデアを練っています。



実行委員の皆さんや出店者の皆さんだけでなく、沼津を自慢する人たちが3日間を盛り上げました。

誇れる沼津に向けて、

私たちにできること

自慢フェスタが開催された3日間、パーテナーと頬を赤らめた人たちの間や、お店を切り盛りする人たちと美味しい料理を買い求めるお客さんとの会話の中で、いくつもの「沼津」というフレーズが飛び交いました。

さらに、ステージを盛り上げる司会者のアナウンスから、そしてお客さんどうしでも「沼津」という言葉が交わされました。加えて、閉幕した後の数日

間も「沼津自慢フェスタに行った？」なんて会話も聞かれ、SNSでは鮮やかなカクテルや美味しそうな料理、雨も楽しんでる姿など当日の会場の様子が並び「沼津」という言葉がインターネット上をも盛り上げました。

この姿は、いつの日か藤原さんが言っていた「どこに行っても、沼津沼津と連呼するんですよ」という沼津愛のスタイルが自然に確立されていると云っていいのではないのでしょうか。

もしかすると、沼津自慢フェスタ

どんどん繋がる沼津の絆

実行委員の橋本さんは「自慢フェスタに参加するパーテナーの間では、老舗の先輩たちと気鋭の若手に、これまでないコミュニケーションが見られるようになったんです」と嬉しそうに教えてくれました。

沼津のよさをお披露目する物産展という側面を持ち合わせている自慢フェスタは、飲食業だけでなく、商工業、農業・水産業など市内の産産を盛り上げていくという使命も持っています。

実行委員の間でも「ブリスが隣り合ったお店どうしが仲良くなって、新しいムーブメントが生まれたらいいですね。自慢フェスタをきっかけに沼津の特産物を使ったキャッチーな商品ができあがったらすごいですよね」とか、「ボランティアやパフォーマーとして参加してくれる高校生やまだ小さくてもワークショップやライブを見て自慢フェスタを感じてくれた子どもたちが、沼津の誇りを確かに胸に刻んでくれて、進学で市外に出たとしてもまた戻ってくるのが理想だなあ」、「会場に足を運んでくれるのは沼津の10%の人かもしれないけど、自分の暮らす街のことを胸を張って誇れる人が100%になつたなら、自然と沼津は世界から注目を浴びるはずだよ」と楽しげな沼津の未来図が描かれています。



言い換えれば、この催しの成否は私たち沼津市民が3日間、どれだけ沼津を自慢できるかにかかっているのです。実行委員長の秋山さんは「この3日間は、市民のみならず日常的に沼津を誇るきっかけに過ぎないと思うんです。もちろん僕たちは軽い気持ちでやっているわけではないですし、やるからには格好よく、これが沼津だ！と胸を張れる3日間になりたい。でもね、自分が暮らす街を自慢するって誰にでもできるんじゃないかって思うんです」と教えてくれました。

風光明媚な景色、山海の幸、ここに暮らす人、そして沼津で練り広げられる物語は、まさに自慢に値するものに溢れています。そんな沼津の魅力に気が付いている人もそうでない人も、誰かに、そして自身自身に沼津を誇ってみませんか。

沼津を愛する気持ちが集まれば、街がもっとよくなり、沼津の力を集めれば、もっと沼津を好きになるでしょう。小さなことから構いません、市民の皆さんのアクションが積み重なっていくことで沼津の街はよくなります。沼津がもっと元気になるよう、日頃から沼津を自慢していきましょう。

